

＊ 年が明けたと思ったら、もう2月・・・，とお感じの方も多いのではないのでしょうか？暦の上では、節分の翌日から春になります。早いものですね。

＊ 節分の豆まきは、さかのぼると中国から伝わったことが元になったようです。古代中国の大晦日に、邪気や疫病を追い払うため、「追儺（ついな）」という行事、鬼の面をかぶった人を桃の木で作った弓矢で追い払う行事があり、これが奈良時代の日本に伝わり、平安時代には宮中で大晦日の行事となったとのことです。豆まきの行事が定着してきたのは室町時代のころからで、江戸時代になると現在のような豆まきの行事が一般の家にも広まったようです。元来は旧暦の大晦日の行事でしたが、立春前日の今の節分の行事へと変わってきたようです。

＊ 節分では豆で鬼を追い払いますが、現代の社会では、欠点を克服して大きな進歩を実現するには技術が重要といわれています。「イノベーション」という言葉が技術と関連して取り上げられるのも、そのような期待が背景にあるのでしょう。社会に「イノベーション」を引き起こし、幸福を増加させる契機となる技術はどこから持ってくればいいのでしょうか、またはどこにあるのでしょうか？外国にもヒントはあるでしょうし、他の研究者の過去を含めた論文が参考にな

るかもしれません。技術者や研究者自身が行ってきた研究開発の積み重ねの中にもあるかもしれません。身近なところでは、学会の行事（研究会や全国大会）でのちょっとした議論にも、きっかけが見つかる可能性があります。

＊ 日本は外国からの文化や資源を上手に利用し消化して、新しい工夫や価値を生み出すのが得意といわれています。島国という条件や自国の資源が乏しいという環境も影響しているでしょう。変わることや、変えることは進歩の源泉になるでしょうし、また活性化につながります。北海道では落花生を節分に用いることもあるようで、節分の行事の中にも新しい試みも出てきているようです。ずっと先の後世では、もしかすると落花生をまく節分が主流になっているかもしれません。伝統的な行事のルーツも探りながら、新しい試みが出てくることも、味わい深いように思います。

＊ 煎った（射るとも同音）豆は福豆とも呼ばれるようです。節分の豆でも食べながら、今回の小特集「次世代サービス品質技術」もお楽しみ頂ければと思います。福をもたらす良いアイデアなど、ひらめけばまた格別ですね。毎年、節分に食べる豆が一つ増えていくように、技術の蓄積も進めたいものです。

（編集理事 山本浩治）